

研究紹介 *Rhif 7*

R. M. Jones (1976) 'The Article in Welsh', *Studia Celtica* 10/11: 326-344.

小池 剛史

カムライグ語の冠詞体系については、定冠詞のみがあり不定冠詞はないという説明が定説である。Morris-Jones (1931) のような伝統文法の枠組みで書かれたカムライグ語文法書では、特定の事物を指すには定冠詞 *yr* (母音の前は形態: 子音の前では *y*: 母音の後では前接辞形 *'r* となる) を伴う名詞句を用い (例 *y bachgen* 「その少年」)、不特定の事物の場合には無冠詞 (ゼロ(Ø)冠詞) である (例 *Ø bachgen* 「(ある不特定の) 少年」)。しかし、定冠詞には「不特定の事物を指す「総称指示」的用法があり、また無冠詞名詞句には総称指示、特定指示両方の用法があり、「定冠詞=特定、無冠詞=不特定」といった単純な構図では捉えきれない。R.M.Jones の 'The Article in Welsh' は Guillaume の言語理論をカムライグ語冠詞体系に応用し、より包括的な記述を試みている。

名詞は単独では *nom en puissance* 「可能性としての名詞」であるとされ、その名詞が指す具体的な例には言及せず、その名詞が潜在的に指し得る無数の具体例に一般的・普遍的に見られる特徴を持った存在、言わば「類」(type) という抽象的存在を指示している。名詞が実際の文の中で用いられると、その名詞が指し得る「例」(example) を指す *nom en effet* 「実際に使われた名詞」となる。冠詞は名詞と結び付くことによって、名詞の指示対象を「類」から「例」へと「現実化」させる *actualizer* という機能を持つ。例えば、辞書に載っている (つまり実際に発話の中で用いられる以前の) *dafad* 「羊」という語は、具体的に「どの羊」を指すかにはまったく言及していないが、実際に (1) のような文で用いられると、*dafad* という名詞句 (ゼロ(Ø)冠詞付き名詞句) はその語が指し得るある一例を指す。

(1) *Mae Ø dafad yn greadur gwyllt.* (*mae* < *bod* の三人称単数現在形; *yn* 補語を示す虚辞; *greadur* < *creadur* 「動物」; *gwyllt* 「野生の」) 「羊は野生動物です」

この例文でゼロ冠詞付き名詞句 *Ø dafad* は、羊のある一例について述べている。しかし、この文の述部は、どの *dafad* の例にも当てはまる普遍的特徴を述べている。従って *Ø dafad* は、上述した、「羊」という類を指す「可能性としての名詞」に近い用法である。ところが (2) の文では、*Ø dafad* は「羊」の具体的な一例を指し、述部はある特定の羊についてのみ当てはまる状況を述べている。

(2) *Mae Ø dafad yn cerdded dros yr heol.* (*yn* 「進行、状態」を示す付加辞; *cerdded* 「歩く」; *dros* 「横切って」; *yr* 定冠詞; *heol* 「道路」) 「(ある) 羊が

その道路を横切って歩いている。」

このゼロ冠詞の用法は、名詞の指す事物の具体例を新たな話題として紹介するものであり、*introductory usage* と呼んでいる。

これに対しカムライグ語の定冠詞 *yr* は、他の印欧諸語の場合と同様、指示詞から発達したものであり、その典型的用法は前方照応的用法 (*anaphoric usage*) である。

(3) (Rwy'n gweld dafad.) Mae *r ddafad* yn cerdded dros yr heol. (rwy'n = rwy (bod の一人称単数の現在形) + yn (「進行、状態」の付加辞) ; gweld 「見える」 ; mae'r ddafad < mae + yr 定冠詞 + dafad)

「(私は (一匹の) 羊が見える。) その羊は (その) 道路を横切っている」

この例文では *r ddafad* は、前の文脈で既に言及された *dafad* の具体例を指している。

(4) Mae *r ddafad* yn greadur gwyllt. 「羊 (というものは) 野生動物である。」

(4) の例文では、*r ddafad* は、「羊」という「類」そのものに言及する名詞句である。

(1) (4) の例文では \emptyset *dafad* も *r ddafad* も共に総称指示 (*generic reference*) と呼ばれる用法であるが、(1) は、「羊」という類の中の一例について、他のどの例にも当てはまる普遍的特徴を述べたものであるのに対し、(4) では「羊」という類全体について述べたものであるという点で異なる。(2) (3) は共に「羊」の例について述べているが、新たな話題として、または既出の話題として言及されているかという点で対立している。

R.M. Jones の説明の中で、カムライグ語のゼロ冠詞と *yr* 冠詞の持つ意味価値を、「特定」「不特定」というものに固定することなく、「普遍的存在」(=類) と「個別的存在」(=例) の間で変動し得るものと規定されている。

この他、次のような点を指摘している。

- 1) 英語やフランス語など不定・定冠詞の体系を持つ言語と比較し、カムライグ語で不定冠詞が発達しなかったのは、後者において「名詞の抽象化」が前者においてほど進まなかった。つまり、英語・フランス語では名詞は単独では「類」という抽象概念を表わしてしまうので、具体的な個別の「例」を指すためには常に冠詞が必要であるのに対し、カムライグ語では名詞のみ (ゼロ冠詞) で、類も例も表わすことが出来る (例 (1) (2) 参照)。
- 2) カムライグ語の数体系において双数 (*dual*) や *internal plural* が保たれていることも、不定冠詞の発達を妨げた。
- 3) 中期カムライグ語では、*introductory usage* の用法 ((2) の用法) で *yr* 定冠詞付き名詞句が用いられている例がある : *Ac yna y bu y kynghor*

ganhunt hwy. (gw. Evans, S. (1951) *Gramadeg Cymraeg Cynol*. Caerdydd: Gwasg Prifysgol Cymru, tud. 14). 「そしてそこで、彼らは集まりを持った。」その後、無冠詞（ゼロ冠詞）の使用範囲が広がっていった。

- 4) カムライグ語における定冠詞のみの冠詞体系は、定・不定冠詞を持つ英語やフランス語の冠詞体系より未発達のものであると見るのは誤りである。それぞれの言語で独自の冠詞体系を持っているのである。
- 5) bod 動詞の前に置かれる動詞前虚辞や、関係代名詞の y(r) は、actualiser としての yr 定冠詞が起源であるという説を展開している。